

Keats の「1817 年詩集」について

橋 本 尚 江

〈 序 〉

Keats の処女詩集が友人 Leigh Hunt の力添えによって陽の目を見るに至ったのは、1813 年 3 月のことであった。この詩集は、1814 年から 1816 年迄の日常生活から生み出された、若き Keats の体験的なソネットや書簡詩でその大半がうずめられている。従って、それらの多くは、確かに、技法的にも未熟で、自然との交わりによる至福感と、その感覚的悦楽を歌うだけに終ってしまったものもある。しかし、この詩集には又、“I stood tip-toe”, “Sleep and Poetry” など、初期の Keats の詩的拠点を知るとともに、のちの展開を探って行く上での大きな手がかりともなる問題作も含まれていた。この小論では、「1817 年詩集」にみられる Keats の初期の詩の特質を考察するとともに、それが後期の詩的展開に対してどのような可能性をはらんでいたかを見究めて行こうとするものである。

〈 一 〉

Keats はこの処女詩集の刊行に際して、“Dedication to Leigh Hunt” と題する一篇を巻頭詩としてかかげた。それは次のような書き出しをもって始まっている。

Glory and loveliness have pass'd away;
For if we wander out in early mourn,
No wreathed incense do we see upborne
Into the east, to meet the smiling day:⁽¹⁾
(1-4)

この “Glory and loveliness” とは云うまでもなく、自然の glory であり、

詩の引用は、H. W. Garrod (ed.), *The Poetical Works of John Keats*, 2d ed. (Oxford, 1958) による。

(1) *Poetical Works*, p. 2.

loveliness である。この一篇が巻頭詩としてかかげられていることの意味を考えれば “Glory and loveliness have pass'd away” の一句をもって Keats は、自然の与えてくれる感覚的陶醉感の喪失、云いかえれば、natural blisses の喪失を詠い上げるとともに、G. Hough が指摘するように、“the realm of Old Pan and Flora” の世界に対する訣別の意志を表明したのだ、と一応は云うことができる。⁽²⁾

それでは、この時期の Keats にとって、自然の glory や loveliness とは具体的にはどのようなものだったのであろうか。又、Keats は、それをどのようにとらえ、どのように受け止めていたのか。そして又、何故それに別れを告げねばならなかったのか。本当に Keats はそれらの喜びを捨て去ってしまったのであろうか。それをあとにして、彼はどこに向おうとしていたのか、などを順にみて行きたい。

自然の glory と loveliness とがもっとも生き生きと表現されている詩としては、しばしば “I stood tip-toe” があげられる。“I stood tip-toe upon a little hill,” という書き出しで始まるこの詩は、発表当時、Leigh Hunt が “it presents us with a fancy, founded, as all beautiful fancies are, on a strong sense of what really exists or occurs.”⁽³⁾ とその精密な自然描写を称賛したように、ここに描き出される自然の美は、明らかに詩人をとりまく現実の風景にその源を発している。「穏やかな誇りにみちた木々の若芽」、「純白の雲」、「緑の草地」など、詩人は実際に眼で見、肌で触れた自然界の与える感覚美を楽しんでいるのである。従ってその意味では、“There is nothing here that could not be seen in a summer afternoon on Hampstead Heath,”⁽⁴⁾ という Hough の指摘はまさに正しいと云えよう。しかし、やがて詩人は、現実の風景に触発されて、さらに彼の心に浮ぶ光景を描き出して行く。Geoffrey Hartman の言葉を借りれば “visual なものから visionary なものへと移って行く”⁽⁵⁾ ののである。

I gazed awhile, and felt as light, and free
As though the fanning wings of Mercury
Had play'd upon my heels: I was light-hearted,

(2) cf. Graham Hough, *The Romantic Poets* (Hutchinson University Library, 1967), pp. 161~163.

(3) Walter Jackson Bate, *John Keats* (Cambridge, 1963), p. 116.

(4) G. Hough, op. cit., p. 159.

(5) cf. Geoffrey H. Hartman, *Wordsworth's Poetry 1787-1814* (New Haven, 1964), p. 131.

Keats の「1817年詩集」について

And many pleasures to my vision started;
So I straightway began to pluck a posey
Of luxuries bright, milky, soft and rosy.⁽⁶⁾

(23-28)

ここで詩人が、比喩的にその posey を摘み取るという luxuries は、少くともこの瞬間は確かに現実的なものである。何故なら、それは詩人の imagination, 云いかえれば詩人の vision から生み出されたものではあるが、その vision は明らかに、彼のまわりの“little hill”で実際に眼にしたものから導き出されて来たものであるからである。従って、もしこれが luxuries であるなら、Keats は依然として、非常に具体的な自然界の感覚美にそのの pleasure の基盤を置いていることになる。

こうした風景に一人の乙女が登場するとき、それは立証されたと云えよう。Keats はこのとき、あやうくこの“sweet thrall”のとりこになりかけるが、彼が屈する前に、乙女は彼を離れて行くのである。そこで彼は尋ねる。“What next?”と。そして、明らかに変化が起るのは、次に続く部分からである。vision のおもむくままに美の世界に遊ぶ詩人はやがて、その快楽の陶酔の中で、“The soul is lost in pleasant smotherings”⁽⁷⁾ともらす。そして次に続く数行は、此の種の状態のもつ素晴らしさが、俗世間から飛翔する手段を与えてくれることにあることを暗示している。

While at our feet, the voice of crystal bubbles
Charms us at once away from all our troubles:
So that we feel uplifted from the world,
Walking upon the white clouds wreath'd and curl'd.⁽⁸⁾

(137-140)

現実的なものは巧妙に背後に斥けられてしまって、詩人の到達した luxuries が先の luxuries とは異質なものであることに我々は気付かざるを得ない。こうして我々は、この詩の prologue として引かれている“Places of nestling green for Poets made”の意味を悟ることになるのである。何故なら、それらの場所は詩人に、俗世界の心配事を離れて憩い、“pleasant smotherings”の快楽へと詩人をいざなう手段を与えてくれるからで、そこで詩人は、自らの fancy に自由の手綱を与えることができるからである。この

(6) *Poetical Works*, p. 3.

(7) *Ibid.*, p. 6.

(8) *Ibid.*, p. 6.

段階の Keats にとって、詩人とは自らをそうした状態にゆだね、そこで育まれたインスピレーションから Cupid と Psyche や Pan と Syrinx, Narcissus と Echo, Cynthia と Endymion などの物語を語る人間のことだったのである。従ってここでは、自然の loveliness や glory は最早、そうした状態を産み出すための手段にしかすぎなくなっている。このようにみると、Keats の中には、本質的に相反する二つの要素一ひとつは、あく迄も現実の自然界に喜びを見出す面であり、今ひとつは、“pleasant smotherings”へと流されて行く面であるが一が存在していることに我々は気付く。しかし、詩人自身は、まだそうした自我の分裂を認識する余地はないようである。しかし、“Sleep and Poetry”と題する「1817年詩集」の巻尾を飾る野心作において Keats は、いくらかそれを認識する方向へ向っているように思われる。

< 二 >

“What is more gentle than a wind in summer?” “Sleep and Poetry”はこのような問いかけから始っている。上の問いに始まり、それに類似した問いかけがいくつか続けられるうちに、やがて我々は、それに対する答が sleep であることを知らされる。しかし、sleep は長い間 Keats の心を占めることはない。彼はすぐ重ねて問いかける。“But what is higher beyond thought than thee?”と。あいまいな暗示を示す数行が続いたあと、やっと、この二番目の問いに対する答えが poesy であることを知らされる。

O poesy! for thee I hold my pen
 That am not yet a glorious denizen
 Of thy wide heaven; yet, to my ardent prayer,
 Yield from thy sanctuary some clear air,
 Smooth'd for intoxication by the breath
 Of flowering bays, that I may die a death
 Of luxury, and my young spirit follow
 The morning sun-beams to the great Apollo
 Like a fresh sacrifice;... ”⁽⁹⁾

(53-61)

ここで表現されている poesy は、Keats にとって、一種の luxury であ

(9) Ibid., p. 43.

り、intoxication であって、“I stood tip-toe”の中でみたあの“pleasant smotherings”と明らかに同質のものであろう。それは、Keats の中にしばしば見出される“swooning culmination”のように、どこか死のにおいを持つ恍惚感なのである。そうしてみれば、poesy も魂の隠れ家(“bower for the spirit”)であると云う点においては、先にみた nature とまさに同じ役割をになっていると云えよう。何故なら、それらは共に、詩人に魂も失われんばかりの強烈な快楽を与えるものであるからである。そこで Keats の初期の詩の中心的イメージであると思われるこの bower の示唆するところについて少し考察してみたい。

bower のモチーフは、Keats の初期の詩にしばしば現れて来ており、彼の自然観、ひいては世界観を語る鍵ともなるイメージである。それは、ある時は、“enclosed, sheltered nook,”⁽¹⁰⁾あるいは“sequester'd leafy glades”⁽¹¹⁾と表現され、又ある時は“a little space, with boughs all woven round”⁽¹²⁾と表現されたりもしているが、端的に云えば、例の“places nestling green for Poets made”の一句に要約されるように、外界から隔離され、何ものにも妨げられることのない安住の地であり、そこで詩人は、美を追い、幻想を求めて孤独な快楽に耽ることができるのである。この一句の背後には、明らかに Leigh Hunt の *The Story of Rimini* の存在があるが、それよりもっと重要なことは、Keats が Hunt の師と考え、さらにある時期には彼自身の師とも仰いだ Spenser の影響がみられることである。

Spenser の *Faerie Queene* における bower は“Bower of Bliss”であり、騎士の旅と探求のモチーフに相対するものである。何故なら、騎士のめざすものは、道徳的探求と成長であり、それは、時と労苦と変化の世界である。他方、“Bower of Bliss”は、時間をもたない題望の世界、変化や発展を受け付けない本能的直覚的生命を象徴しているからである。騎士の続ける道徳的探求の旅にとって、それは、shelter と rest という危険な快楽への誘惑を表わしているにすぎない。Spenser の描く騎士が、“Bower of Bliss”の誘惑を乗り越えて、探求の旅を続けねばならなかったように、それは云い変えれば、positive なものと negative なもの、active なものと passive なものとの対照でもあった。⁽¹³⁾

(10) Ibid., p. 43. : “Sleep and Poetry”

(11) Ibid., p. 12. : “Calidore”

(12) Ibid., p. 7. : “I stood tip-toe”

(13) J. E. Hankins, *Source and Meaning in Spenser's Allegory: A Study of the Faerie Queene* (Oxford, 1972), pp. 178~183.

ロマン派の詩人たちは、この bower のモチーフを受け継ぎ、彼らなりに発展させて行った。Wordsworth の “Nutting” は、詩人の魂の成長を描いた自叙伝風な作品であるが、この中で彼は、少年による bower の破壊を成長に必要な一段階としてみている。しかし、Spenser における “Bower of Bliss” が、騎士の使命に全く相反する後退的なものであり、その破壊は積極的なモラルの姿勢を象徴していたのに対して、“Nutting” における少年の態度はもっとあいまいさを残している。bower を破壊した直後、彼の前に横たわる “shady nook / Of hazels, and the green and mossy bower, / Deformed and sullied,”⁽¹⁴⁾ をみると、彼の高揚感は「苦痛の感覚」と混じり合うのである。しかし、快樂の経験（ここでは bower に踏み込むことを意味するが）は、人間の成長にとっては欠かすことのできないプロセスであり、それを経ることによって、本当の意味での自然との交わりが可能になるのだ、というのが Wordsworth の意図であった。つまり、Wordsworth は、Spenser の伝統を受け継ぎつつも、bower のもつ否定的要素を意識的に取り去ったのである。

Keats の初期の詩における一連の bower のモチーフが、こうした伝統を受け継いでいるものであることは明らかであろう。Keats も “Sleep and Poetry” の頃から早くもこの bower を越えることの必要性を予知していた。それは、彼にとってはとりもなおさず、“Old Pan and Flora” の世界に訣別することであった。しかし、それにもかかわらず、Keats の初期の詩は、この bower に深く沈潜したままであり、しかも彼のこのモチーフの用い方はきわめて多様である。それが、必ずしも文字通りの「自然の中の美しい一点」というにとどまってはいないことは、すでに述べた。疲れた詩人がまどろむ sleep も、それ自体が “more healthful than the leafiness of dales” な bower なのである。初期の詩に出てくる自由のヒーローたち、Kosciusko や Alfred なども又、その名前そのものが bower であり、「そこから気高い感情を刈り取る豊かな収穫」⁽¹⁵⁾ なのである。そして、芸術作品は、もうひとつの bower と考えられている。例えば、チャーサーの詩、“The Floure and the Lefe” を彼は、「小さな雑木林」と呼び、“a little copse : / The honied lines do freshly interlace / To keep the reader in so

(14) Thomas Hutchinson (ed.), *The Poetical Works of Wordsworth* (Oxford, 1950), p. 147.

(15) *Poetical Works*, p. 42.

sweet a place,”⁽¹⁶⁾と歌っているのである。又、Keats は、Hunt の *The Story of Rimini* 中に読者は、「自分自身の場所、魂の木蔭」(“a region of his own, a bower for his spirit”)⁽¹⁷⁾を見つけるであろうとも云っている。

Keats はこのように、従来の bower についての伝統的概念を受け継ぎつつも、さらにそれを、空間的概念から心理的概念へと変えることに成功している。そこには最早、Spenser にみられたような否定的、後退的要素は存在していない。しかし、Keats の bower によって描き出される世界も又、明らかに、自ら働きかけることのない受動的の世界であり、何かを与えられるのをじっと待つ、時間の停止した世界である。bower のとらえ方にみるこうした Keats の受動的姿勢を説明してくれるものとしては 1818 年の Reynolds 宛の書簡の一節が役立つであろう。

...let us not therefore go hurrying about and collecting honey-bee like, buzzing here and there impatiently from a knowledge of what is to be arrived at: but let us open our leaves like a flower and *be passive and receptive*—budding patiently under the eye of Apollo and taking hints from every noble insect that favors us with a visit—sap will be given us for Meat and dew for drink.⁽¹⁸⁾

(イタリック筆者)

初期の詩においては、単に暗示されるだけにとどまっていた Keats の基本的姿勢を、この手紙は明確に説明してくれていると云えよう。この手紙の中で Keats は、蜂に象徴される能動的姿勢と、花の受動的姿勢を対比させ、後者が、詩作にとってより爽り多いものであることを暗示している。自然を征服するのではなく、自然に征服されること、そして、自然の一部となり、自然のリズムに参与することの意義を説いているのである。そうした姿勢が、あの“Negative Capability”⁽¹⁹⁾につながるものであることを思えば、bower のもたらすある積極的な一面が説明されていると云えよう。しかし、初期の詩において Keats は、あまりに深く bower に傾斜しすぎていたがために、そのもたらすこのような可能性をまだ認識するには到っていないというのが本当のところであろう。

Keats の bower について見逃すことのできない一面としてはもうひと

(16) Ibid., p. 40. : “To Kosciusco”

(17) Ibid., p. 364. : “Written at the end of ‘The Floure and the Lefe’”

(18) Ibid., p. 365. : “On ‘The Story of Rimini’”

(19) Hyder E. Rollins (ed.), *The Letters of John Keats* (Harvard, 1972), vol. I, p. 232.

つ、それに必ずと云っていいほどつきまどっているある暗いトーンである。先の引用にみた “pleasant smotherings” や “death of luxury” などが暗示するように、bower のもたらす魂の悦楽は、その究極に死のにおいを感じさせるものである。pleasure の強烈さと自我の喪失という連想は特に新しいものではないが、“pleasant smotherings” と云い、“death of luxury.” という時、Keats の前には、世界と自我とが共に捨て去るべき厄介な重荷として横たわっていたのである。疑惑と不安にみちた世界、そしてそれを感じ取るあまりに自意識の強い詩人の自我、Keats は己れが人一倍感受性の強い人間であったが故に、それから受ける苦痛を何かで癒さなければならなかった。そして、その何かは、初期の詩では、bower への憧れだったのである。この憧れが彼の精神に深く根ざしたものであることは、それがすでに、彼の書いた一番最初の詩のひとつに表現されていることからわかるであろう。

Fill for me a brimming bowl
 And let me in it drown my soul:

 ... I want not the stream inspiring
 That fills the mind with—fond desiring,
 But I want as deep a draught
 As e'er from Lethe's wave was quaff'd;⁽²⁰⁾
 (“Fill for me a brimming bowl,” 1-2, 5-8)

〈 三 〉

Keats の初期の詩における bower への傾斜は、彼の受動的姿勢をあらわすものであり、その底流には、自我の喪失への欲求が流れていることはすでにみた。しかし、“Sleep and Poetry” の先にあげた引用(9)に続く部分で Keats は、詩の創作は、能動的プロセスであり、詩人が自我の喪失に抵抗するとき、はじめて真の詩人になれるのだと云うことを認識し始めている。Apollo のいけにえとなるよりも、むしろ彼がその “overwhelming sweets” を身に占め得ることが出来るなら、詩人には、“fair visions of all places”

(20) Cf. “... it struck me, what quality went to form a Man of Achievement especially in Literature and which Shakespeare possessed so enormously — I mean Negative Capability, that is when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact and reason...” (Ibid., vol. I, p. 193.)

が与えられるであろうと。⁽²¹⁾ ここでも又、自我の喪失を望む彼と、自我の消滅に抵抗する彼の、二つの分裂した意識に我々は出会う。それは、云い変えれば、先の受動的姿勢に対する彼自身の懐疑の声でもあった。しかし、この二つは、未整理のまま、単に暗示されているだけにすぎず、特に後者は、ただちに、例の“pleasant smotherings”へと流されて行く傾向を持つものであった。従って、あの“Ode to a Nightingale”にみられるような、感覚の世界に埋没しようとする彼と、暗い現実を引き戻されるもうひとつの彼、云い変えれば、自我の喪失への欲求と、堅固な自意識、との合間をたゆとう見事な緊張感はここにはまだ存在していない。自我の喪失に抵抗はしてみても、それはまだ、あのように複雑で成熟した自我の認識を産み出すには至っていないのである。

自我の喪失への欲求と、それにあらがう意識との間を揺れ動きながら、やがて詩人は、“O for ten years, that I may overwhelm / Myself in poesy;”⁽²²⁾と願う。そして彼は、半ばエロティックな白日夢の中で、再び“Old Pan and Flora”の世界の生み出す様々な喜びを想像し続ける。そこに登場してくる“white-handed nymphs”のかもし出す世界は、きわめて感覚的であって、詩人は、彼らとの交わりのもたらす快楽に又も溺れそうになる。しかし、この nymph たちの快楽よりもっと興味深いのは、彼女らが詩人を誘って行く場所である。それは、簡単に言えば、例の“places nestling green for Poets made”の別な表現であり、詩人はこのとき、まさに bower の中心にいるのである。しかし、やがて彼は自らに問いを発し、同時に答えも与えている。

And can I ever bid these joys farewell?
Yes, I must pass them for a nobler life,
Where I may find the agonies, the strife
Of human hearts: ...⁽²³⁾

(122-125)

この部分の解釈は、批評家によってかなりまちまちであるが、これを、快楽の世界を拒否して、reality を受け入れる方向へと向う Keats の進歩だと受け取る Lowell 女史は、それに続いて、ヒューマニストとしての詩に対するマニフェストウが展開されるのを期待したが、それに代って、あいまいな

(21) *Poetical Works*, p. 427.

(22) *Ibid.*, p. 43.

(23) *Ibid.*, p. 44.

vision がくり広げられるのをみて失望した、と述べている。⁽²⁴⁾「1817年詩集」のテーマを、“Old Pan and Flora”に対する訣別であるにとらえる批評家の多くは、事実、こうした解釈に基いているといえよう。確かに、語句通りに受け取れば、これは、ひとりよがりの快楽に耽る詩人から、より普遍的な人間の苦悩をうたう詩人への飛躍を期待させるであろう。何故なら、殆どすべての批評家が指摘しているように、確かに Keats は、この時、Wordsworth の、あの人間の成長の各段階についての説⁽²⁵⁾に影響を受けていたことは事実である。即ち、幼児の頃の自然に対する無意識の反応と、そこから生れる快楽とはやがて失われ、人間は成熟という義務と責任を負って行くという Wordsworth の見解は、意識していたにせよ、無意識であったにせよ、Keats の心にある影響を及ぼしていたことは確かであろう。⁽²⁶⁾ がしかし、ここで Wordsworth の段階説を、そのまま Keats の詩にあてはめるのは、いささか危険ではなからうか。Keats は本当に、“Old Pan and Flora”の世界の喜び、云い変えれば bower のもたらす様々な快楽とそのものうい受動性に別れを告げたのであろうか？決してそうでないことはやがて明らかになってくる。

人間の苦悩や、心の争いのみられる、より高貴な人生へと歩みを進めるためには、これらの喜びに別れを告げねばならないと勇ましく宣言する詩人の前に、今、一連の vision が展開される。それは、山をおおう雲の上を駆け上って行く「一台の馬車」と「乳白色のたてがみをした駿馬！」であり、「御者は重々しい恐怖にふるえて月をみつめている」。やがて、馬車は、「輝く太陽にそのまわりを銀いろに縁どられて」大空を舞いおり下界にやって来る。⁽²⁷⁾

(24) Ibid., p. 45.

(25) Amy Lowell, *John Keats* (Boston, 1925), p. 223.

(26) Cf. Wordsworth's Ode: "Intimations of Immortality from Recollections of Early Childhood" (op. cit., pp. 460-462.)

(27) Cf. *Letters*, vol. I, pp. 280-281.

ここで Keats は、人間の成長段階を three Chambers にたとえている。第一の部屋は、幼児の頃の thoughtless Chamber であり、人間は思考力を持つ迄この部屋にとどまるが、やがて第二の部屋、Chamber of Maiden-Thought に入る。そこは、“pleasant wonders” にみちあふれており、人間はいつ迄もそこに在る事を望むが、やがてこの部屋も次第に暗さを増し、“Misery, Heartbreak, Pain, Sickness and oppression” などの充ち充ちた第三の部屋へと向う扉が開かれてくる。そして、自分は今、第二の部屋にいるが、やがては第三の部屋に向わねばならないことを Keats は予感している。〈この項に関しては C. D. Thorpe, *The Mind of John Keats* (New York, 1926), pp. 43-47. 参照〉

そこで御者は、不思議な身振りで木々や山々に話しかける。すると、詩人の前には、次のような光景がくり広げられるのである。

... and there soon appear
 Shapes of delight, of mystery, and fear,
 Passing along before a dusky space
 Made by some mighty oaks: ... (28)
 (137-140)

ここで、空を駆け上る駿馬として描かれているものが、“high imagination”のシンボルであることはやがて明らかにされるが、重要なことは、その上方へ向う飛翔である。先にみた“Old Pan and Flora”の世界が受動的姿勢の象徴であるなら、これは逆のきわめて能動的な姿勢であると云わねばならない。そして、“shapes of mystery, of delight, and fear”が、人生の種々相、神秘や喜びとともに恐怖をも含んだ、ありのままの人生の姿を表わすものだと解釈するなら、この部分の暗示するところはかなり明瞭になって来る。つまり、bower のもたらす魂の悦楽にじっと身を潜ませ、そのもたらす vision に耽る消極的姿勢を脱して、より積極的に、imagination を大空にはばたかせることによって、詩人の視野は広げられ、より豊かな人生を歌う詩人へと成長することが出来るであろう、というのが Keats の云わんとするところであったように思われる。従って、“Sleep and Poetry”における Sleep が感覚的悦楽に対する陶醉を象徴していると解釈するなら、Poetry は、その陶醉の中に決して自己を埋没させまいとする詩人の醒めた意識を象徴していると云えよう。この詩の冒頭において Keats が、Poetry を Sleep よりさらに詩人の心を惹くものとして位置づけていたことを考え合わせるなら、bower のもたらす魂も失われんばかりの受動的快樂から脱け出そうという詩人の意図を、我々はここに、かなりはっきりと読み取ることができるのである。

しかし、だからと云って、彼が“Old Pan and Flora”の世界を捨て去ってしまったと考えるのは早計であろう。東の間のあいだ、詩人を訪れたこれらの vision が消え去ったあと、その喪失のほろにがさをかみしめつつ、彼は、現代における詩の悲嘆すべき状況を考察し、エリザベス朝の文芸を、過去の栄光として、それと対比させている。

... the high
 Imagination cannot freely fly

(28) Cf. *Poetical Works*, p. 45.

As she was wont of old? prepare her steeds,
 Paw up against the light, and do strange deeds
 Upon the clouds? Has she not shown us all?
 From the clear space of ether, to the small
 Breath of new buds unfolding? From the meaning
 Of Jove's large eye-brow, to the tender greening
 Of April meadows? ... (29)

(163-171)

空とぶ駿馬が imagination であることは明らかになったが、ここで注目すべき事は、その上方へ向う飛翔と同時に、下へ向う飛翔も又言及されていることである。すなわち、“Jove's large eye-brow” や、“clear space of ether” は上方の領域であり、叙事詩の領域でもある。一方、“the small breath of buds unfolding” や、“the tender greening of April meadows” などは他でもない、すでに捨て去ったはずの Flora と Pan の世界以外の何物でもない。それは又、云い変えれば、叙事詩的領域に対する牧歌的な領域でもある。従って、真の imagination とは、崇高な世界と同時に、bower のもたらす快樂も含み得るし、別な角度から云えば、叙事的なものも、牧歌的なものも共に含み得るのだと Keats は云っているようである。そう考えるなら、これは、「苦悩や人間の心の争いのみられるより高貴な人生」を歌うために、“Old Pan and Flora” の世界に訣別しなければならぬと宣言した先の引用 (23) の部分とは明らかに矛盾してくる。しかし、ここにうかがわれることは、当初の予想とはうらはらに、Keats が Flora と Pan の世界を決して捨て去ってはいないことである。いや、それどころか、Keats の中における bower の占める位置は、こうした思考のプロセスを経ることによって、以前にも増して確固たるものになって来たような感じにさえ襲われるのである。「1817年詩集」のテーマは、自然のもたらす喜びに対する訣別ではなくて、むしろ、その celebration にある、という F. R. Leavis の指摘⁽³⁰⁾ は、その意味でまさに正鵠を射ていると云えよう。

〈 結 び 〉

F. R. Leavis は、*Revaluation* の中で、Keats と Shelley を比較し、前者の美があく迄も現実のものにその基礎をおいているのに対し、後者は、

(29) Ibid., p. 45.

(30) Ibid., p. 46.

「現実を把握する力が弱い」として、Keats の評価を高い所に置いたが、⁽³¹⁾「1817年詩集」の多くにおいては、Keats も又、明らかに現実的なものから遊離しようとする傾向が強かったことは明らかである。Keats の初期の詩が、他のどの時期の詩にもまして逃避的であるというそしりを受けがちであることは事実であり、⁽³²⁾ そうした批判の多くが、彼の bower への傾斜に起因しているのも又事実である。外界から隔絶された詩人のための安住の地を求め、自然との交わりのもたらす至福感に酔いしれることは、確かに、ある意味では「逃避的」というそしりを免れ得ないであろう。しかし、Keats の詩の特質が、あく迄も現実の自然界から得られる感覚的喜びにその基盤をおいているところにあるとするなら、この bower は Keats の詩にとっては不可欠の要素であるとも云えよう。何故なら、Keats にとって、感覚的な喜びのすべては、この bower から発していたからである。勿論、彼は、bower だけでは真に成熟した詩は得られないことを知っていたし、その受動性を克服するために、豊かな imagination を形成することが彼の急務であることも自覚しつつあった。しかし、bower に訣別しようとするほど、それへの傾斜が彼の本質に深く根ざしたものであることを Keats は認識せねばならなかったのではなからうか。

“Sleep and Poetry”において Keats は、bower を越えることが出来たのではなく、むしろ、その重要性を再認識しつつ、bower の受動性に対立するものとして、imagination の積極的な活動を見出しつつあった。しかし、それはまだ確実なものではなく、この二つが見事に融合して詩に結実されるためにはまだ時間が必要であった。「1817年詩集」は、いわば、感覚美の世界に埋没しようとする彼の、詩的覚醒への旅立ちと、その間の葛藤とを言葉にした若き Keats の内面の告白の詩ではなかったであろうか。

(31) F. R. Leavis, “A Revaluation of Keats”, *Revaluation: Tradition and Development in English Poetry* (Chatto and Windus, 1936), p. 273.

(32) *Ibid.*, p. 204.

(33) Cf. Morris Dickstein, *Keats and His Poetry* (University of Chicago, 1971), p. 26.

THE FUNCTION OF BANKING CAPITAL, ESPECIALLY
THE RESERVE FUND, FOR BANKING
MANAGEMENT DURING THE CRISIS OF 1907

—a study of the history of English joint stock banking—

Hitoshi KOJIMA

During the crisis of 1907 almost all the joint stock banks in England wrote down their holding securities and premises through the deminuation of their interests and Reserve Funds. The diversity which might be classified as follows was characteristic of the Reserve Fund and they attributed to one cause i.e., the Reserve Fund had been mainly got from issuing new shares with premiums.

(1) Banking Capital (Paid-up Capital and Reserve Fund) was the bank's own money. The Reserve Fund was the bank's funds for paying dividends.

(2) Banking Capital was a fund with no charge, a bank's main resource of cash money, and a bank's safe guard for depositors.

(3) The Reserve Fund was deminuation funds for writing down securities and premises.

(4) The Reserve Fund was moved in secret funds for contingent uses.

(5) The Reserve Fund was ear-marked for long time investments. The pluralism of the bank's Reserve Fund should attract more attention for historians who study banking history, especially the amalgamation movement in English joint stock banking.

On *The 1817 Volume* by John Keats

Hisae HASHIMOTO

It is said that no part of Keats' work is more vulnerable to the charge of escapism than his early works. In so much of the *1817 Poems* and *Endymion* Keats is in explicit flight from the actual, seeking out "places of nestling green for Poets made."

One motif which recurs so frequently that it seems the epitome of his sense of nature is the bower.

This paper tries to identify Keats' view of nature in his early works through the bower motif.